

ヒラケんは有書

田路修良先生講義

外科右論

硬部

水利方論 七ノ一ノ五ノ五ノ五

頭部及胸部的疾病

竹青柱水利の疾病

第一章 喉頭及氣管、小傷及疾病

咽喉の病、此病、人ニ於テ、喉頭、造播軟者、核腫核ニシテ、湯カ時ヲ有テ、故ニ

能勢高テ、口ノ損傷、ク、マ、ク、容易ナラズ、然レ、口、四、十、年、以、上、ニ、其、時、ハ、軟、者、ニ、石、皮、變、時、見、候

骨ノ事、容易ニ、喉頭、竹傷、致スルコトナリ

舌骨竹傷ハ、甚ク、稀ナリ、乃、モ、其、ノ、經、脈、カ、ニ、入、ル、ノ、由、骨、竹、傷、患、者、中、ニ、三、ノ、一、ノ、骨、ニ、舌

骨、ノ、竹、傷、シ、ム、人、ハ、甲、狀、軟、骨、竹、傷、ノ、合、候、カ、リ、一、通、ノ、舌、骨、竹、傷、ニ、就、テ、其、大、角、咽、頭、軟

腫、下、ニ、移、動、ス、ル、コト、著、シ、ク、嚥、下、困難、ヲ、呈、ス、ル、コト、ナリ、其、ガ、由、ハ、嚥、下、困難、ト、云、フ、此

ノ、竹、傷、ヲ、整、復、ス、ル、ハ、咽、頭、活、息、子、ノ、挿、入、ヲ、要、ス、ル、コト、ナリ、又、此、竹、傷、ノ、如、同、コト、造、リ、鏡、鉤

ヲ、用、テ、大、角、ノ、位置、ヲ、正、復、シ、或、ハ、止、ラ、得、ル、時、ハ、之、ヲ、却、除、ス、ル、コト、ナリ

者一定ノ症候ヲ呈スニ至リテ之ヨリテ午候ヲ施スキ時期ト定メテ其ノ肝要ナリ
之而ノ其初候ハ左ノ如シ

(一) 口唇青色 (二) 鼻翼ノ汗及暈物 (三) 呼吸時ニ於テ鎖骨上窩陥没

(四) 呼吸時ニ際シテ胸中ノ氣逆及之ニ隣接セシムル者柱ニ向テ陥没ノ者

此等ノ症候ハ皆呼吸ノ管ニ於テ氣逆ノ高只ノ管ノ管中ニ入ルヲ証ス者ナラ故ニ生
ニ注目ヲ要スヘシ呼吸ノ管内ニ流動セシムル者積ルモノハ切同所ノ應用症ニ至リテハ
口内及咽喉ノ手術ニ於ケル由血脈水ニ於テ水脈既既時ニ管ニ入ルニ管既既粘
取性修治物鳴囉保母速際時ニ於テハ胃氣及胆汁逆ナリノ証候ニ管ニ入ル
入ルニハ氣管切同所ニ施シテ管カチラシムヲ抑メ之ニ因リテ呼吸ノ管ニ入ル
管割口ヲカチラシムヲ抑入ルノ法ニ替テ口内より抑入ルノ道ニテ氣管切同所ニ
テノ法ニ至レバ水脈引ノ管ニ初生候ニ至リテ是利ニ至ル事行カズ初生候ニ
於テハ口内及咽喉ノ距離短キニ至リテ容易クカチラシムヲ抑入ル及僅ニ得ヘト候

此長也ノ腹ニ於テハ呼吸地ニテ於テ固直ナリテ故ニ氣管切同所ニ施シテ其割口ヲカチラシ

ムヲ抑入ルノ法ニ替テ口内より抑入ルノ道ニテ氣管切同所ニ施シテ其割口ヲカチラシ

可考ス

中七取 環状管切開術ノ形式

(実験的里臣性喉頭枝葉ニ自ラ特ニ論ス)

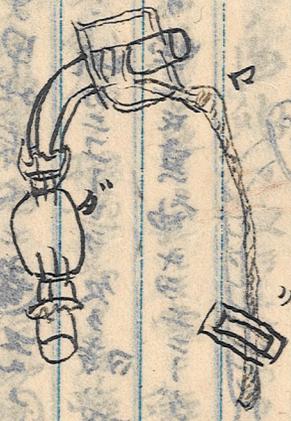
実験的里臣性喉頭枝葉ニ自ラ特ニ論ス
此ニハ僅ニ括弧内見ルヲ以テ之ニ後想ヲ得且因雅増盛ノ為ニ連腺病ヲ察止之可
クナリ又時々血液ノ酸化程度衰シ是後其内ニ蓄積スニ因リ一種ノ知覚鈍
麻ヲ致シ患患シテ今術ノ疼痛ヲ只僅ニ感セシムルヲ術ニ当テハ患患ラシク御取
ヤメ頂部ニ枕子ヲ置キ介者面ヲ以テ見頭ヲ後方ニ導キ且ツ固定シテ頭ノ
前部ヲ露出セシ術者ニ頸ヲ手指ヲ以テ甲狀腺ガ且環状軟骨ノ諸部ヲ外方ヨリ
穿刺シ以テ明ニカク下ニ手指ヲ定ムヘシ蓋シ見ノ喉頭ハニシテ其皮ノ因像的
ニ察ルニ時々呼吸困難ニ感シテハ頸脈血ノ前部ニカクテ一種ノ管状指後固多
ク細ク分岐梳ノ突出スルニ其ノ少キカ故ニ容易ニ其初位ヲ認知シ難キナリ以テ

ナリ皮膚層切開ニ至リ左手ノ拇指及示指ヲ以テ其初ノ皮膚ヲ左右ニ緊張シ甲狀腺ガ下
部ヲ環状軟骨且氣管上部ノ中線ニ導キテ全ク鉛直ニ切開シ之ニ切創ノ長クハ大約五cm
トシ之ニ於テ左手ノ中指及示指ニ於テ頸ノ各部分ノ殊ニ大動脈管中内方
ヲ搜索シ諸ラ之ヲ切離スヘシ此ニ於テ常ニ其中線ヲ失ハスニ血管ヲ傷ツルノ恐ナリ
而シテ何ノ鉗鉤ヲ取リ其間ヲ左右ニ排開ス時ハ上方ニ環状軟骨甲狀腺帯ヲ見中ニ環
状軟骨ノ前部ヲ見其下部ニ於テ直ニ甲狀腺嚢ヲ見入リ蓋シ上方ニ氣管切開術ヲ施シ
テ甲狀腺嚢ノ上部ニ密接シテ結締織ヲ攪乱スル等ニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ル
セニ時トメハ甲狀腺ノ中ニ實即或薄クシテド極厚起リテ環状軟骨及上部ニ密接ス
輪ヲ被フツアハカ故ニ宜ク注意スヘシ此ノ葉ハ其右ニ一定スル時ハ又更長クテ各骨道
ニテ切開シ(即ち如シ)環状軟骨ヲ露出スルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ル
トト出血多クナリ然レハ呼吸困難甚ク強クシテ呼吸器血盛ニ至ルニ至ルニ至ルニ至ルニ至ル
切開ノ數ニテ呼吸困難切開ニ先テ結核病者ノ穿刺法ニ用リテ之ヲ制止セザレ可

此後接用カニエーラ用ニ之ハ品例ニ一レラ備ハ呼吸上之向キ声門ヨリ口腔
 ニ達スモナリ或ハ口鏡有者ノ下端ヲ存シ其下端氣管ヲ噴ク在道セカニ即
 射サントモカニエーラヨリ又ハ管ノ外レニ余ヲテ呼吸ニ此レヨリテ呼吸
 声門ヨリテ口腔ニ達スル装置カニエーラヨリテ呼吸ニ此レヨリテ呼吸
 鏡ヨリカニエーラノ装置ヲ受カニ鏡ノ管ノカニエーラニ接シテ呼吸道
 ノモナリ良ハスル事ニ鏡ノ管ノ者ハ其一部銅製噴流シテ氣管右時部
 入スルアレハナリ工項ヲ考スルハ
 此ニテ呼吸道ノ管ノモトニ甘ナシ鏡ノ管ノ管ヲ以テテハ呼吸ニ此レ
 カカリ管内ニ声門ヲ噴クハナリ得ヘシ



之レ氣管及氣管ニシテ多ク液ヲ流入スルヲ用ニモリシト上段ハ喉嚨呼吸
 其途用ノキ所用如用術ノ喉嚨呼吸等ニ此レノ呼吸的氣管用術ニ此レ
 此ノカニエーラヲ應用スル其途用ノ用ニ此レヲ見ル可シ



此管ヨリテニ氣管内ニ挿入シテ後ヨリ管ヨリ噴出シテ空氣ヲ吸入シテ而シテ
 レンテハモトテ此管ヲ用鏡ニ此レノカニエーラニ替ヘシ中ヨリテ呼吸道
 推定スルヨリ而シテ其ノ部ノ空氣管ヲ以テテ呼吸道ノ部ヲ推定スル
 呼吸道ニ此レノカニエーラヲ用テテ呼吸道ノ部ヲ推定スル
 呼吸道ニ此レノカニエーラヲ用テテ呼吸道ノ部ヲ推定スル

修者之氣噴、其野多、ミラロク、ク、解、修、ラ、既、迄、其、局、部、病、等、ヲ、控、新、之、
ヲ、テ、テ、テ、只、播、ラ、テ、
且、土、氣、道、之、分、以、卸、時、ト、テ、又、氣、道、之、内、ニ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
例、ヒ、氣、道、切、開、ヲ、施、ス、モ、其、初、極、ノ、極、ホ、前、進、ニ、テ、止、サ、シ、テ、常、ト、ス、
術、後、我、噴、ノ、發、生、シ、燒、マ、ス、ト、身、内、氣、道、切、開、口、(學、ハ、テ、同、上、テ、) 一、層、管、カ、
活、出、シ、得、ル、但、テ、
義、噴、ヲ、相、解、ス、ニ、水、蒸、氣、ノ、入、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
と、小、兒、ノ、吐、林、ニ、(一、) 一、ダ、ハ、吸、入、器、ヲ、備、ハ、カ、エ、コ、レ、ノ、前、口、ニ、向、テ、其、蒸、氣、ヲ、
控、制、セ、シ、ム、ヘ、シ、其、蒸、氣、ハ、グ、リ、ス、リ、ニ、由、リ、テ、粘、噴、ノ、特、水、液、露、ヲ、増、進、シ、之、由、リ、テ、
義、噴、ノ、相、解、ヲ、容、易、ナ、ラ、シ、メ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
破、ラ、思、ス、テ、
ヲ、換、シ、其、蒸、氣、ノ、直、ニ、石、炭、酸、ノ、修、用、ヲ、止、ム、テ、其、他、石、炭、水、口、ノ、水、孔、

酸、等、ノ、諸、毒、ヲ、吸、入、若、ク、ハ、漏、入、目、ノ、用、ス、テ、テ、
右、ノ、如、ク、屋、息、ヲ、吸、入、指、法、ヲ、行、フ、ト、身、内、插、氣、道、ニ、氣、道、之、分、心、部、ノ、乾、燥、
ヲ、修、過、シ、能、ハ、シ、テ、住、テ、之、ノ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
吸、入、テ、吸、入、シ、能、ハ、シ、テ、住、テ、之、ノ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
ニ、於、テ、
項、聖、ス、テ、物、質、ヲ、吸、入、ス、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
必、大、禁、煙、ノ、禁、明、キ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
即、ロ、ラ、カ、テ、
感、セ、ヤ、シ、テ、
却、テ、感、ホ、シ、テ、同、ニ、於、テ、直、ニ、吸、引、ラ、シ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
ル、ヲ、接、陰、ス、ニ、由、リ、テ、病、的、分、心、部、ヲ、口、内、ニ、吸、引、ス、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、
醫、師、ノ、為、ニ、危、険、ナ、ル、ヲ、素、ヲ、論、ラ、候、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、テ、

2054

クフツヨクノ管物ニまゝニテハ心造ノ火換ラヌニ至ル此ハ私ニ於テハ新
口ノ因縁ハ類ニ連ニ来ヘリアリ之即チクフツヨクノ退却スル後ヨリ盛ニ由リ
ラ養生スルニ依ルヤ又稀ニ稀ニ極メ美備ニ由テ血管ノ輪ヲ狹窄ラヌ
スレバ此ハ初ニ於テハ氣傷ノ治法ヲ知ルニ當テカニコレヲ挿入シテ氣ノ
管切開ク及復スル止ムラ得ヤリ又稀ニ極メ美備ノ者雖ニ及シテ血管切開ク
之時ハ同被セヘリヨリ即チ血ヲ初ニ損テ其後復舊ノ力ヲ養ヒテ其後復舊ノ
事ヲ養育シ之由リテ居テ血管ノ輪ヲ造カレリヨリ（此種ニテハ初ニ用
ズル成形ノ所ニ於テハ管ノ道ヲ狭ク成形ノ所ヲ考テスヘシ其他ノ所ニ
ハツツルルノクニコレノ所ノ所ニ於テハ氣管成形ノ所（ガロンコラス）ノ一般成
形法ニ於テハ厚ノ輪ヲ名ノ造ルニ由ルニトス此長ニ就テハ氣管ノ輪ヲ考テ
セヨ又故意ニスレカニコレヲ挿置シテ血管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊
ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊
ノ往ニシテアリ

ヲ得ル時ニ如ク是ナリ

第一ニ血管ノ輪ヲ造ル

テカニトウハゲシ此病ノ常ニ初ニ曲ノ道ニ入ルカニシ

ノ任道ニ基固ニスルニ至ルニ至リ其後復舊ノ所ニ於テハ血ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊
此ノ由リテ於テハ時トシテ彈力カテラテラ用テ流ルル血ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊
患者ノ望見ラ防シテ留スルヨリ此種ニ於テハ血ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊
ヲ用ルルヲ見ルニ至ル

第二ニ血管ノ輪ヲ造ル

ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊

ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊

ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊

ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊

ノ往ニシテアリ即チ初ニ狹窄ノ所ニ於テハ氣管ノ輪ヲ造ラシメテ其後復舊

以テ外頭腫ノ如クトス パヒロー

(ハ)ニ史福ハ多ク、蓋ガ軟骨ノ邊ニ起ル、傳ノ舌門帯ニ向テ若ク、同時ニ
著、後方ニ著者ニ咽頭ノ下端ヲ侵ス

(三)内腫サレマ、ハ多クハ喉頭ノ側壁ニ著

(イ)ニ論ニ細有者、截在喉ノ其聲門ニ被觸ス、際只一時、痰索ヲ起スニ
過キ、此腫ヲ患フ患者、ハ多ク、只嘔吐ヲ禁テ、食ヲ止メ、ハ痰液ヲ

或ハ喉頭腫ヲ治スニ、喉頭鏡的検査ヲ要ス、此検査ヲ行フニ、
諸般ノ種類トモ、器械アリトモ、尤ニ其用略ノ方ヲ講セ、云即

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

指ラ以テ之ヲ射鏡ニ取リ、之ヲ口蓋乳ニ正點シ、(イ)ヨリ及射鏡ニ走線ヲ
九手ヲ以テ有柄ニ射鏡ヲ取リ、之ヲ口蓋乳ニ正點シ、(イ)ヨリ及射鏡ニ走線ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

第十二項

喉頭検査ヲ行フ之目的ヲ以テ施スル、喉用切法ヲ論ス

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

此検査ヲ行フニ、結核トモ、癌トモ、梅毒トモ、用スモ、ト同一ト、單及射鏡
ト有柄、ハ及射鏡トモ、用スモ、其名夫ヲ纏包シ、自室ヲ

達ニ能クシテ常ニ喉頭切開ヲ施スル確實ノ法トス

升傷及老病ニ絶然スルハ、痲痺性狹窄ニ於テモ喉日夕行及喉頭切開
ヲ行フニナリ即此狹窄ヲ既ラ喉内ニ於テモ痲痺ヲ去リ難シキ後錫
性楔形或ハ空氣ヲ盈タスル彈カコム管或ハ他ノ擴張器械ヲ挿入スル
ニ用リ蓋シ彈カ取極的狹窄アリテハ襌ヲ先ツ氣ヲ切開行ヲ施スニキ事
有リ之ヲ以テ喉頭切開ヲ行フノ前氣ヲ劍口ヲ上祀ノ器械ヲ喉頭ニ
挿入スルヲ試ムヘシ

又デゴロイス氏ハ氣管カラムレシヲ即チニ區別シ各事括別ニシテ挿入シ而シテ後螺
旋裝置ヲ以テ之ヲ連合固定ノ器械ヲ創製スル即同ノ如シ
右ニ記ス諸器械ヲ用ヒ比シテ寧ロ氣管切開ヲ施スルヲ以テ優レリトス
蓋シ狹窄切開露出其ノ輕重等ニ隨テ痲痺部ヲ切開スル等ノ治法ヲ
自由ニ行フヲ得ルヘキ也ト云ヒ喉頭切開擴張器ニ復ラテ結成スル用

ノ痲痺的喉頭狹窄ニ於テハ喉頭切開ヲ復スルキ事莫クハ屢ナリトス又擴張
器械ニ於テモ後ニ考テ痲痺的萎縮ヲ去スル虞ナキヲ免レ難ク故ニ痲痺
的痲痺ニ於テハ擴張法ト切開法トヲ論ビテ後述ノ痲痺萎縮ヲ去スル
ヲ完全器械ニ於テモ試ムヘキトス

細考有ルニ喉頭腫瘍ハ口内ヲ以テ除クニハ便ナリ更ニ疑フ者ニ於テ此
等ノ腫瘍ヲ除クニハ喉頭鏡的手術ヲ行フヲ以テ最モ善トス即喉頭鏡的
ニ喉内ニ照明シ術者ノ器械ヲ口内ヲ以テ喉頭ニ送リテ腫瘍ノ基ヲ固定シ表
面切離然ル等ニ由リテ之ヲ除クニハ又ハ喉頭鏡的ニ行フニハ便ナリ更ニ疑フ者ニ
於テハ口内ニ器械ヲ挿入スルノ術ヲ又復施用シ逐ニ之ヲ除クニ得ル者アリ
唯頭上腫瘍ニ於テハ喉頭切開ヲ行フニハ他ニ治法ナキモノトス(ペーパル氏ニ於テ
二十九人ノ喉頭腫瘍患者ニ喉頭切開術ヲ施シテ其ノ良獲ヲ得ル者ト云フ
喉頭切開下部或ハ食道ノ上部ヲ侵スニ至ルニハ喉頭切開ヲ行フニ最モ困

辨よりす 而こころに氏カ十五ノ痛腫患者ニ論せし喉頭切除ニ於て其ノ
年以上生治せしモノハ僅ニ二人ノひとりこころに之ニ及べし物ニ喉頭ニ於て之ノ
肉腫ハ痛腫ニ比スルニ其腫治大ニ可良ナリト云即此知ニ於テハ此人ノ甲
状切開ニ因テ治程せしモノハ觀且つ三人ノ喉頭切除ニ因テ之ヲ會テ再裝之
テ治程せし者ヲ見タリ

第十四項 甲狀切開術ノ方法ヲ論ス

喉頭切開術ノ應用症ハ前案ニ於テ之ヲ詳論セリ而シテ所謂喉頭切開術毎
常心スルハ切開術ニシテ甲狀軟骨面裏ノ接合部切之ルモノ即見テ
又横切口ヲ造リテ喉頭内ニ達スル術ナリ即舌骨下喉頭切開術(舌下
咽頭切開術)前ニ論セシモノハ内鏡狀軟帶ヲ横切スル術等之ニ屬ス軟
述ニ術ヲ稱シテ局部喉頭切開術ト云見等ノ横切開術ハ其創口ハ小ニシ
喉頭内ニ達スルノ名介ナラス為ニ目的ヲ達シ難キト多キ故ニ甲狀切

開術ヲ以テ優レシモノトナス

甲狀切開術ヲ行フニハスルノ氣至切開術ヲ行ハば接合カミレテ血液ノ氣
管之内ニ流入スルヲ防グべし若シ其手術甚々切迫ナラバハ氣管切開術等
ク時日ヲ猶豫シ患者カミレシニ由リテ呼吸スルヲ習慣スル後甲狀切開術
行フヲ良トス甲狀切開術ヲ行フニテハアタム此種ヨリ内鏡狀軟帶ニ異ニテ
皮膚ヲ縱切シ其創ノ下角ニ於テ内鏡状軟帶ヲ切斷シ甲狀軟骨合線
ヲ切斷シ此ヨリ喉頭内ニ達スルモノハ内鏡状軟帶ヲ切斷スル此ノ
如ク横ニ其上部ニ切斷スル切斷スルニ以テ是ノ良トス此際左右ノ咽
骨舌骨面切斷スルニ要スルモノハ内鏡状軟帶ヲ切斷スルニ以テ是ノ良トス
此ヲ避ルべし又月鏡状軟帶ヲ其中心ニ於テ切斷スルモノハ環状軟帶ヲ切
斷スルニ似テ今ハ長剪カヲ用リ其身鏡葉ヲ下ニテ上ニテ舌骨面切
入ニシテ由リテ左右甲狀軟骨接合部ヲ其中線ニ於テ剪斷スル若シ其切

シカク下ニ腫瘍ノ前部ヲノ盡ク喉頭ニ繋着セシム可シ是咽頭ノ
一部腫瘍ノ為ニ後サレシムハ喉頭ニ共ニ其部ヲ除去スラ要スヘシ又甲
狀軟骨ノ後側縁ヲ切斷スルニ先ニ之ヲ接合スル甲狀腺ノ側葉ヲ剝離
スヘシ此際注意シテ可ク甲狀軟骨縁ニ密接シカク用ニヘシ蓋シカ又甲狀腺
蓋ニ向テ上甲狀軟骨ヲ損傷スルハ其部ニ於テ喉頭ノ上部ニ至ルニ至
離ニ来シヘシト舌骨トノ接合ヲ切斷スルニ注意ヲ要スヘシ但シ其癒腫
ノ大ホニ準シ切離スルニ方向ニテ差異アリテ論ヲ佳クスト魚比ト大腫瘍ニ於
テハ舌骨果大動脈ノ區域ニ於テ切離シ合殿軟骨ヲ損傷セザルヲ
良トス近時ビロロト此力ヲ折セシ一患者ニ於テハ大約喉頭ノ半側ヲ
除去シテ餘リシコトアリテ其合殿軟骨ヲ切除スルハ合殿部ノ肌肉ヲ
損傷セザラ得ス而シテ胸骨舌骨筋ノ肌肉甲狀軟骨合骨筋等ノ喉
頭ヲ被フ部合骨筋之上ニ除去セザルハカラス又丸右ノ上下喉頭筋等ハ其

切離シ免レ難シ此ハ其出血ハ直ニ結紮ヲ施スニ由リテ容易ニ止シ
得ヘシ若シ腫瘍蔓延ノ景況ニ由リ甲狀腺ノ一部若シハ咽頭壁ノ一部ヲ
除去スルニ要スルハ甲狀腺筋ノ上行筋蓋筋等ヲ損傷スルカ為ニ其止
血稍困難ナリ
喉頭切開後ノ隔室ニ嚔下組織ノ隔室ヲ以テ是ニ大テラトスハ蓋ニ喉頭切開
キハ百七十三年ニ於テビロロト此ニテ行ヒシヨリ蓋ニテ當時ノ理見ニ於テ
創傷後後嚔下組織漸次ニ復古スルヲ確定セリ此ハ今術後未
カヨリ切開ノ向ハ食道消息ノヨリテ人ノ官能ヲ損見コトナリ素ヲ
論ヲ後トス而シテ術後數日同ノ持病ニテ食道消息ノヲ挿置スル是良
トナシ食後ニ嚔下ノ毎食時動口者ハ日ヨリ之ヲ挿入スヘシ又最初
同ハ合殿筋他筋蓋筋等ヲ施シテ患者ノ体カヲ保持スヘシ創傷
治癒ノ後ハヨリテ喉頭筋等ヲ咽頭壁ニ通スル此口ニカ

喉部或ハ氣管ヲ自傷スルハ一ニ見ルモ即此ハ喉ノ損傷ノ
時ニ從テハ氣道ノ損傷ニ由ルニ素ヨリ輕易ナラズ而シテ喉ノ損傷
ニ其創傷ヲ數傷スルニ於テハ其傷傷ノ主幹ヲ損傷スルヨリ
強動スル血ヲ失フ常ニ(甲狀腺ハ元々其ノ血管ニ富カク故ニ例ニ
主幹ヲ損傷スルニ當リテ)又ハ氣管切開術ヲ行フ時ニ甲狀
腺ヲ損傷スルニ免レシカモトス

甲狀腺ハ廣其動脈アリテ通常此腺ノ右左ニ頸部ノ外ニ於テ之ヲ見
ルニ任令ハ咽部側壁胃管側壁等ニ於テ副腺アリカ也
勿種ニハ見ルニ於テハ其動脈多クハ環狀骨ノ下縁ニ密接スル血
成人ニ於テハ此ノ上ニ上部氣管軟骨輪ノ下ヲ見ルヲ常ニ
氣管切開際ニテ甲狀腺切開スルハ其初ノ數日間ニ於テ喉ノ軟
腫脹スルヲ多クニ見ル時ニハ甲狀腺且副ノ腫脹性高致性蓋ヲ致スルカ

是ニ至ルハ喉ノ損傷ヲ免ルニ力キテ之ヲ免ルニ力キテリヤノ為ニ侵

襲セラルルニ由リテトス

甲狀腺且副ノ損傷ニテアランカクモ甲狀腺ニテイルライトカク此ノ健全
無病ノ甲狀腺ニ於テハ切開術ヲ行フ時ニ是ノ上ニカクモカクモ果
ニ成形過多ヲ生ズル時ニハ其同僚ニテ是ナリトス又他
性腫毒及他ノ傳染性熱病(チフス等)ニ於テ健全ノ甲狀腺ニ轉移
シテ生ズルハ殆ド之ヲ見ルニ果シテ甲狀腺腫ニ於テハ其副轉移甲狀
腺腫ヲ生ズルカ

其他甲狀腺腫者ハ甲狀腺ニ屬スルカクモ一過性甲狀腺腫見
ルニ屬スルニテ即婦人月經時或ハ妊娠ノ初期ニ於テ之血ニ由ル
甲狀腺腫脹ノ如キハ之ニ屬ス

第十六項 甲狀腺腫生ズル原因

小囊五ニ融合シテ大ニ空同ニ變シ内ニ膠様ヲ充塞ス

三ニ囊腫性甲状腺腫^{ストローム}ノ為ニ膠様變性ヲ生ズ

十ニ其一部或ハ全部ニ流シ合膠様融合シ以テ不透明ニ囊腫性空

同ニ變スニ由リテ發生ス此空同ニ囊腫液ヲ更ニ血管ニ漏ラシ

雅且或ハ其外ニ呼吸様増息ヲ致ス若シ此囊腫内ニ出血ヲ生ズ

琴様液ニ初テ暗褐色ノ液ヲ含シ其後ニ此如ク囊腫性ニ變シ膠

質ニ大腺腫且或ハ球状ニ變修スラ常トス之ヲ精密ニ検査ス

動ヲ呈スルハ

四ニ血管性甲状腺腫^{ストローム}之ニ血管殊ニ動脈ノ拡張ニ原因ス

其拡張易キ時ハ皮膚ヲテ膨大拡張セル脈管ノ搏動ヲ認知シ且

指ヲ以テ血流ノ脈搏ニ應シテ脈動スルヲ感知シ得ヘシ此ニ

然類ハ頸皮ノ一アノサリニスニケルイデスニ類似ニ故ニ又ニ

腺腫^{ストローム}ノ為ニ稱アリ且軟近シラセシ小兒ニ於テ若シ血管ノ

アリテ搏動ヲ呈スルハ甲状腺腫ヲ極見シ之ニ合スルニ搏動性

ヲ以テセリ

初理解列ニ於テ上記セル種々ノ外截在性甲状腺腫^{ストローム}

性甲状腺腫^{ストローム}カニカニニニ種々ノ甲状腺腫^{ストローム}ニ

成形過多ニ起目スル甲状腺腫ノ外真ノ悪性腫瘍ヲ甲状腺

健全ナル甲状腺ニ於テ或ハ陳旧ナル甲状腺腫ニ生ス

以テ腫瘍ノ五五ノ名故ニ(ラス)此悪性腫瘍ノ肉腫

常ニ大ニ腫瘍ヲ形成シ且茶色連カテラシテ之ヲ

脆核腫ヲ柔軟大核ヲ生シ或ハ截在性腫瘍性ヲ

截在性腫瘍ニ於テハ若シ奇異核質ノ核様著

腫瘍常ニ核質ノ著シキ連ニ思液質ヲ生シ

ハハ素ヲ金候トナシラス時トハ此端ハ田リ気管狭窄ヲ来シ呼吸困難ヲ
致スルヲ

稀ニ甲状腺腫結節ヲ遠達桂子(江ノ)ヲ生シ悪性ノ経過ヲ取ルル
蓋シ柔軟ニ腫瘍結節甲状腺内ニ増息其一片血液ニ由テ断離
セラン遠隔セル体内ニ四肢骨ノ骨髓且截内ニ腫瘍轉移ヲ致シ由テ

別大項 甲状腺腫ニ於テハ 甲状腺 甲状腺炎 甲状腺腫ニ於テハ

急死

甲状腺腫ニ發ス者其ニ天ニ轉奪リテ去アララハ心スニ 腫脹ノ大ホ一吸セテ放ニ大
ニ甲状腺腫ニ強ト著者ト者ヲ又ホテ甲状腺腫ニ強者ト強劇ト著者ト
新スルル而シ尋常ノ甲状腺腫ニ於テハ 嚥下困難ヲ来スニ稀ナリト云ハレ
ニ後方咽喉後甲状腺腫ニト云フガ 或ハ胃管後甲状腺腫ニト云フガ

ニ於テハ 嚥下困難ヲ致スル者ト其他患者著者ト云フ呼吸困難也
ラハニ此者ト之ニ具腺腫ノ大ホニ用ヒテ去ララハ 腺腫ノ血管ノ位置関係
ニ用テリ即甲状腺腫ノ血管ノ後壁ニ向テ發育スルハ其圧迫ニヨリ具ク
呼吸困難ヲ来ス又硬固大血管前壁ニ腫レ圧迫セラレテ血管内全ク
狭窄ヲ来スルヲアリ 其他気管壁ニ一層ノ軟化ヲ来シ其内徑ハ依然ト雖
ニ由リ呼吸管壁ノ收用ヲ来シ易ニ窒息ヲ致スルヲアリ又甲状腺腫左
右両側ヨリ気管ヲ圧迫シテ恰モ 劍鞘ノ如ク變形セシメ呼吸ニ氣管狭
窄ヲ来スルヲ

沈伏性甲状腺腫 タウヘンデニ 頸ノ中線ニ位スル小ホ甲状腺腫ニシテ不定中
量感ハ缺クシ呼吸ニ甚シク容易ニ移動スル性ヲ有シ呼吸運動ニ際シテ胸
骨上窩ニ向テ下降沈伏シテ氣管ヲ圧迫スルヲ常ニ目テ急峻ニ来ス

損傷ヲ修テ且ツ腺腫ヲ除ク時同ヲ戒シ以テ止血法ヲ連カサシムルモノナリ
軟近キ所又縮帯ニ仿膏法ヲ適用スニ多ク早時腺腫ヲ除ク成瘻歟
ル直良トナリ術後死ニ至ハセテ著シク減少セリ(ブルブルガハハノ統計ニ目
二百二十四人、手術ヲ施セシ患者中八十八人、治癒ヲ見タリ(即百三十九
ノ死ニ至ラズ所來所膏法ハ食糜固クニ隨ヒ死傷ニ亦減少スルナリ(若シテ
術ノ際誤テ又行神等ヲ切棄スルハ創傷治癒ノ後來市ヲ遠引クテ
スニシボシネツト此ハ沈伏性甲狀腺腫ヲ療スニ内ニ又賦自量減ヲ以テ其
腺腫ニ刺入シ之ヲ胸骨上窩ニ自定シ其位置ニ於テ内ニ又賦自量減ヲ放
置シコロヒ重鉛錠ヲ以テ腺腫ヲ荒蕪スル法ヲ採用セリ

第三章 食道外傷及疾病

第三十項 食道ノ切創及損傷

食道切創ハ肉ノ氣道ノ切創ノ如ク扱ヒ只自害ヲ試スル際ニ於テノ之ヲ
殺スルノ同時ニ食道ヲ破リ喉部或ハ氣管ヲ損傷シ併存スル素
リ論ヲ後々ニ以テ切創ノ新ニシテ且ツ平滑ニ其ハ精密ニ縫合ヲ行フヲ
宜シクニ以テ條時宜ニ用リ預メ氣管切開術ヲ施スニテコトヲ兩縫合
腸腹ヲ用ニテ良シク縫合術ハ腸管縫合術ニ準スル(腸管縫合)又
或ハ人ハ縫合術ヲ施スヲ不可トナシテモコトヲ切開術ニ創口ヲ縫合ニ開放
セシムルニ切ハス患者ノ管理良ハ食道閉塞ニ因リテ入可ラス(蓋シ飲食
物ノ一部誤テ氣管ニ竄入スルハ腐敗性氣管炎及肺炎ヲ起ス患ニ
ハヤリ

喉頭及食道ノ横切創ニ縫合ヲ施サハヤリ喉頭ノ兩部ニ以テ同ノ食道
創縁其間ニ実ガシラ頸部ノ皮膚ヲ縫合シ以テ瘻管或ハ食道瘻管ヲ
形成スルヲ防グ(同日參考見)

この二は此等此和ニ成形所及複合所
(尿道層ノ中傍ヲ)ヲ施シ其標ヲ程
合シムル也

氣管及食道ノ交通ハ外傷ニ起因スルハ異物ノ貫穿及腐敗性食道瘻
腫ノ蔓延ニ由リ來ルルヲ又息ノ病ニ先天性瘻ニ由リ交通スルルヲ
キハ肺尖ヲ起シテ連レテ生ズル死ヲ致スルヲ
食道ノノ來ルルハ刺創及銃創ハ食道其側方ヨリ侵襲セラルルヨリ
之ヲ救フ此種ノ起ラセシメテ力盡テ肉芽ヲ生ズルニ至ルルハ食道消息
子ヲ以テ管表ニテヲ塞スルハ食物ノ一ハ食道用田ノ吉且哉ニ
古著シ膏狀性蜂窩質ヲ起スルルヲ
尖銳ヲ銳短ヲ有スル異物ヲ嚥下スル者ニ致スル食道ノ損傷ハ息ノ危
峻ニ屬ス候ホ尖銳ハ骨片硝子硝子魚骨針板蓋等ニ因リ致スル刺傷
ハ此等針ハ淺ク無害ニ傳中ヲ經過シ遠傍ノ皮下ニ至ルルハ小切

開ラ施スルヨリ容易ニ摘出スルキヨリハ細ク或ハ短ク運動ニ由リ遊走シ大動
脈切斷等ノ大血管ニ刺入シ強割ハ出血ヲ起シテ患者死ニ至ルルハ此等針ハ
カニ道後部愈下部ニ其針銀腸内ニ進入スル虞ヤルヲ以テ此等針ハ
ナクテ而シテ針ハ上部肺心臓ニ至ルル者ニ穿テテ後來肺膿成ルルハ
尖銳ニテ異物存存ハ侵襲胃腸ノ大支脈等其他の異物ハ魚骨如キ直
達ニ食道壁ヲ刺シテ來スルルハ甜ニ其食道ニ指入スルニ由リテ其壁
ノ膿腫ヲ起シ其部貫穿シテ食物ノ食道用田結目管内ニ穿入スル
アリ又付ノ異物ノ氣管ニ貫穿スルルハ此等針ハ食物ノ氣管ニ穿入スルル
ニ由リテ死ヲ致スル者ナリ其他食道内異物ノ甚シクハ氣管ヲ圧迫スルル
窒息ヲ致スルアリ
食道用田結目管内ニ針板貫入スルルハ其是物貫穿ニ由リテ膿腫貫穿ニ
由リテ同スル常ニハ急病ニ至ルルハ直達ノ原因トスルハ此等針ハ膿

下此消息子下端の月階より多うの末より一何或は二何の口ヲ備其
孔口二何ナレキハ若其水平ヲ異ニシ百葉側ニ位スルモノナリ
食道健在ニシテ消息子挿入ニ際シテ只其一局可抵抗ヲ感ス是即食道
入門ニテ喉頭環状軟骨後極難ニ近接ニテ位ニ於テアリ此抵抗ヲ近
ニ抗シテ示指ノ舌根ニ送リ舌合爲軟骨筋帯ト名ニ粘膜腺積積
合脈軟骨ト名ノ間ニ指端ヲ達セシメ之ヲ釣然ニ曲ルニテ舌ヲ下顎
ニ引シ以テ喉頭ヲ前方ニ進コシムハ此際舌指ニ食道消息子下端
リ咽頭壁ニ向テ之ヲ壓送シテ之ヲ舌根ニ抗抑ナラシメ自ラ食道ニ滑
ニシ
食道消息子挿入後舌當者ヲ極シテ極ニ其汁端齒列前ニ接出セ御
ニ海リヲ有シ而シテ極ニ當者取テ灌注スヘシ若シ身灌注速カテ其
際、攻端ノ促カシ指ヲ喉心ニ於テ之ヲ加テ兩斗内ニ入流セシムナリ

食道消息子又胃中合有物ヲ排除スル用ヲナシ任令ニ中患在ニ於テ
亦如ク此目的ヲ達スル爲ニ滑種ノ胃咽頭アリト能ク内何ニ傷リテ物
之ヲ詰ルニ至ルニ其急ニ際ニ挿入スル消息子ノ汁端ニ吸引水鏡ヲ有
心持テ吸引スル由リテ胃中合有物ヲ吸出スル得ハシ
粘種者飲食ヲ拒ミ口ヲ塞フ用ニ者ニテ當者ヲ行ハントスルニ口ヲ食
道消息子ヲ送スル能ハスル此病ニ消息子ヲ下累道ヲ咽頭ニ送ルニ舌
管ニ達スルニ得ハシ此際口ヲ閉カスニテ喉頭ヲ頸推テ隔離セシム
端ヲ舌根ニ極メテ下顎偏有粘種ニ至テ其ニ舌ヲ前方ニ吸引スルニ但シ此
技術ニ於テ極ニ難シ消息子ヲ喉頭内ニ挿入スルニテ
小兒ニ消息子ヲ挿入スル際ニ舌ニ指入セシ術者、指ヲ咬ムルニ
避ルルニ指ヲ以テ見テ下唇ヲ下門齒ニ出離銀ニ向テ圧送スルニ此
任令ノ指ヲ咬ムルニテ自來ノ口唇ヲ咬ムモノナリ

第二十二項 食道内異物ノ療法

細管を以て嚙下せしむるは、食道内ニ稍留せし時ハ
胃ニ之ヲ胃中ニ挿入スルニ之ヲ行フニ固シキニ示スルハ、鯨骨條消息子ノ挿入
性球頭ヲ有スルモノヲ以テシテ、所謂食道挿入器トシテ、以テスル
鯨骨條消息子ノ下端ニ一塊ノ海綿ヲ固着セシメ、又由行、ハ絲ヲ共
鏡ニ異物ハ只ニ食道ヲ貫通スルニ至ラズ、腸ニ賦送セズ、ニ當リ、他ハ
ニ相違ス、不慮ニヤ故ニ適宜ノ器械ヲ以テ食道ヲ上ニ送リ、由
挿入スルハ、自ラ之ニ屬スル異物ハ、殊ニ骨片、硝子、梅核、針、類ノ魚
骨、他、骨ト挿入シ、解シ、胃中ニ遺シ、胃液ノ作用ニ違テ、腸
ニ至リ、軟化スルニ至リ、土ニ魚骨、他ノ骨片、同シ、挿入セザルハ、カスレ、而シテ
銅貨、胃ヲ直筋ニ達スルニ固シ、銅中蓋ヲ嵌メ、鏡ヲ以テ、胃中ニ之ニ當リ、無
稽ノ屬スルモノハ、胃ニ遺スルハ、便器ニ送リ、一、和候ヲモ、便器ニ送リ、ナク、ナク、腸ヲ

經過シ、大便ト共ニ排泄セシ、高ニ變化シ、呈セルカ、或ハ僅ニ酸化セルニ過キ、ナク、若
クハ、ナク、食料、又可及的ノ口内ヲ挿入スルヲ試ムル

大人ニ在リ、テ、異物挿入器械ヲ挿入スルニ先ニ、有球頭鯨骨條消息子、以テ
異物ノ存スル否、及、其位置ヲ探知スルニ、即チ、異物ハ、食道ノ最上部ニ在リ、
最ニ多ク、之ニ次テ、喉門ノ直上ニ在リ、多ク、又、食道ノ中央部、其内至、最ニ薄
キカ故ニ、異物ノ存スルニ、挿入器械、且、時、ノ針、或ハ、魚骨、其、塵、刺入ス
ルカ、ハ、ナク、ナリ、若シ、患者、如ク、推シ、器械ヲ挿入ニ困難ナク、消息子ノ挿
査ヲ有キ、直ニ、挿入法ヲ行フ

食道異物ヲ除去スルニ、自ラ、有リ、テ、挿入器械、ハ、フック、グレイ、ニ、氏、ノ、釣
針、最ニ、ナク、ナリ、テ、鯨骨條消息子ノ下端ニ、銅鐵、或ハ、洋銀、以テ、
製シ、テ、有、塞、小、籠、子、ヲ、合、スル、者、之、ヲ、挿入スルニ、際シ、小、籠、子、ノ、平、端、板
ハ、食道ノ前後、壁ニ、準シ、テ、下降スルモノナリ、而シ、テ、挿入シ、異物下部ニ

第二十三段 食道狭窄症

食道狭窄症其原因は随て區別なき概不考也

(一) 炎症性狭窄 此は加量乳汁強硬類等、高熱性可有之
液は嚥下之基固く而る者能く之を部ニ於て、固く是れ減且或
能く随て肉芽を發生之由肉芽は之を岩端ニテ埋固トスニ随て吐逆
毎月ハ後漸次狭窄ヲ起ス可也

(二) 癌腫性狭窄 是ハ食道腫ニ上史癌ノ生スニ由リテ来ルモノナリ
道、上三分一初或ハ下三分一一部ニ發生スル日多ク中更、三分一初ニ環
之ハ甚ク稀ナリトス(若シニ三十年以上ノ人ニテ著クハ外國ナクニテ後日
嚥下困難ヲ来スルハ心又常ニ食道消息ニテ検査スルヲ忘ルルカ
ラズ而テ茲ニ消息ノ前ニ痛ク有テ軟骨湯息ヲ以テ優
トス蓋シ癌腫ニ多ク其中心廣闊ニ周縁ハ幼稚ニ癌細胞ノ浸潤

二因り此等ニ提ルニ陰影ニテ常ニ今消息ニ於テ之ヲ扱ハルル疾
障ニ初方ニ達シ此ニ於テ腫瘍ノ生長自在ナリトス其ニ進歩ノ前ニ
狭窄部ニ達スルニ至リ、狭窄部ニ即チ癌腫ノ下級ニ進スルニ至リ、是ヲ以テ
久シク経過セシ癌腫ニ於テハ、初、狭窄部ヲ在ルル常ニ此狭窄部ノ外
ニ至リ、癌腫ノ大ホク變知スルヲ得ヘシ今他ノ食道癌腫ニ於テハ、癌腫
腸胃ニ侵ルニ至リ、ニ解接スル消息ニ於テハ、高熱性癌腫ニ即チ之ヲ

(三) 盲腸別道 此ハ、胃ニ自ラニ食道狭窄 此ハ、二種ノ一ハ先天性ノ
モノ、二ハ後天性ノモノナリ、而テ別道腫ハ粘膜且腸胃ノ腸胃ニ侵ルニ由リ
粘膜ヲ剥離シ、其ノ後、粘膜索ハ、而テ腸胃ノ腸胃ニ侵ルニ由リ、
別道ヲナスモノナリ、此、而テ盲腸別道トシテ、食道擴張部ニ、之ヲ區別
セサルハ、カラス、蓋シ、狭窄部ニ、著シキ、潰瘍ナク、之ヲ、蓋スル、
五ニ、癌腫性、或ハ、腸胃性、狭窄、上部ニ、發生スル、蓋シ、此ハ、食道ノ、知

短形擴張をモリ下防場スルルニテハ而首或副道ノ生天性ニ
 アラハ者ハ外方ヨリモテ引(及合)盛ニ擴張スルニ時(如)内方ヨ
 リテ内道ニ起用スルルト似想スルルラスモ副道ハ生天性ニテ
 秘候ヨリ生天性ト雖も飲食物ヲ食フ其力ニ窺入ルルヨリ首蒙膨脹
 擴張ニ而モ其擴張スルルニ合道暫クニテ其内ニ窺入セシ飲食物
 ヲ吐逆スルルニ飲食物其内ニ充満スルルヨリ例方多合道ヲ内道ニ
 患者田吉ヲ詔スルルニ其其ニキキ至ルルニ食物中ニハラスノ多ク副
 道内ニ窺入ルルニ飢死ニ陥ルルルニ是ハ其ノ事ナリト云
 其他又ハステリト性下田道ト石ノニ在リ之レ合道ノ狭窄ニ由ルニ
 患者自ラ其合道狭窄シカニ内窺入ルルニ其ノ事ナリト云
 合道狭窄ノ事ハ検査ヲ以テ之ヲ科學ノノ報目ニ論スルル
 消息ノ検査ニ於テ素ヨリ検査性石ノニ痛腫性ノ狭窄ノ事

又ト短形此レ又消消息ノ降リテ胃中ニ達スルル知患者自ラ其心ヲ驚
 逸ニ其自覚ヲ出遊スルル妙動アリト云
 合道狭窄ノ事ハ検査ヲ以テ之ヲ科學ノノ報目ニ論スルル
 道内ニ患患スルルニ時ト喉嚨門ニ向テ
 馳進セラシ聲然トノ呼吸困難ヲ来スルルヨリ
 大ナル胸部膨脹(多ク)例方多ク中道ニ向テ其力ニテ(合道)内道
 迫ルルニ時ト下田道ヲ来スルルニ時ト肺ヲ向テ其力ニテ(合道)内道
 下ラ肺室セシモノナリ
 必ニ二十四時 合道狭窄性検査法
 検査性検査ノ検査法、是良之ニ因芽ノ兵ニ被痕程ニ甚縮セシト時
 期ニ於テ合道狭窄性検査ヲ行ニテ而此法ヲ始テ行テ適スル時
 期ニ検査高飽腹ヲ下ニテ二週日後アリト云此レ以テ期ニ於テ食

不通性狭窄下部食道ニ位スル胃切開所ガストロヲ施シ持久性胃瘻ヲ造ルコトアリ

可通性狭窄ヲ擴張スル消息ヲ用ル所ニ代テ較速伸張トシラトスル内食道切開所イブゴトミアヲ施サレバ此所ノ食道切開子オカソフ

カクニ易域ヲ以テ之ヲ行フモノナリ(食道切開子ノ造捨ハ尿道切開ニ用ルコトワシカニ尿道切開好トリスルニ要似ス)此ノ内食道切開所ハ

危險ノ術ヲ造ル所ヲ行ヒ患者セム中四人ノ死ニ至ルモノナリ

第五項 食道腫性狭窄ノ療治
食道、腫性狭窄ニ醫學ノ今日ノ面目ニ於テハ猶不治ノ疾患屬ス其部位食道、頸部ニ在ルハレセウチオン所ヲ施シテ腫腫ニ侵サレ

タル部ヲ除クニコトアリ、雖ニ常ニ再發ノ危險ヲ免レシモノナリ、腫腫性狭窄ノ多ク、和氣被痕性狭窄ト稱シラトスルハ此ノ消息ヲ

周

用ニテコトアリ、塞レ之ヲ挿入シ且ツ腫腫ヲ生ル部ヲ通過スルニ當リテ袖ヲ挿

入シ加ヘ輕ク之ヲ壓送セサルコトヲ云ヘ、動モスレハ球頸腫組織ヲ破リ或ハ出血或ハ急性高熱ヲ起シ終ニ貫穿セラルコトナリ又消息ヲ

球頸柔軟ニ強且或ヲ穿テ食道周圍組織ニ達シ此部ノ高熱性炎ヲ起シ患者ヲ死ニ至ラシムコトアリ、而シテ有球頸消息ニ比シテ

柔軟ニ強ク性食道消息ヲ以テ危險トキモノトシ且ツ同時ニニ管腔ヲ行フ、徑アリ此ノ狭窄部ノ強阻礙健康ニ及ビ彈力性消息ノ容易ク成田シ道通ノ効ヲ衰セサル者ナリ、病ニ他ヲ用ニ通直ニ採用スル

如シ
瘻腫性狭窄ニ於テハ食道切開所ヲ施スコトアリ且ツ適ニ瘻部ハ此ノ

另一果實瘻ノ空異物狭窄ノ上部ニ稍角シ他者ニヨリテ之ヲ摘出シ能ハサル

第一 扶明強弱ノ右種ノ内息子余道過セカ病ニ於テ切用ヨリ
 指ヲ送入シ扶明部ヲ擴張ス時、物創死ヲ指フ望アモ、
 扶明ノ部位ニ由リ胃切用所ヲ行ヒ持之性、曾獲ヲ造ハリマ、
 畜敗性強ク會道無腫ニ於テ會道内息子ノ客れヨリ防番限
 ヲ確任シ畜敗性強揚面ヲ洗除ス時、大ニ其効アリ、(蓋成ニ括
 魯見更知、弱階所ヲ見モ可トモカ)此レモ、元令ニ經驗也
 第二十六項 會道切用所、オカシク又會道切除ヲ論ス
キコサニ、カ、ノ統計ニ由リ、會道切用ヲ施セシ五十二人ノ患者中、廿五
 ノ治程ヲ見而、會道異物ニ由リ切用ヲ施セシ、三十三人中死ニ帰セシ
 者、二只六名ニ止レリ
 會道切用所ノ道舊物、段ニ前ニ論ヤリ、能任里ニ之ヲ指クモ、左ノ如シ

(甲) 會道異物指角 (乙) 一種性扶明 (丙) 一種性扶明
 會道切開術ニ於テ、オカシク致軟部ニ於テ切用ス、キ會道部ニ當リ標的ヲ在ル
 時、大ニ手所ヲ容易ニス、ノ便アリ、大ニ異物ニ於テ、其物自ラ標的、オカシク能
 此他、私ニ於テ、切用ニ先々會道内ニ挿送スル、器械ヲ用テ標的、オカシク

即、オカシクカ、オカシクバ、オカシクリ、オカシクニ、オカシクリ、オカシクイ、オカシクセ、オカシクノ、オカシク會道彈簧器是ナリ、オカシクエ、オカシクト、オカシクロ、オカシクボ、オカシクキ、オカシクリ、オカシクテ、オカシクレ、
オカシク固中、オカシクカ、オカシクノ、オカシク彈子、オカシクノ、オカシク器械ヲ、オカシク挿入ス、際ニ、オカシク其、オカシク球、オカシク頭、
オカシクス、オカシクニ、オカシク彈子、オカシクノ、オカシク端、オカシクノ、オカシク端、オカシクノ、オカシク上、オカシクニ、オカシク彈、オカシクク、オカシク時、オカシク球、オカシク頭、オカシクカ、オカシク套、オカシク散、オカシクヲ、オカシク脱、オカシクシ、オカシク其、オカシク左、
オカシク例、オカシク位、オカシクニ、オカシク鑄、オカシク像、オカシクヲ、オカシク出、オカシクテ、オカシク會道、オカシクノ、オカシク左、オカシク隆、オカシクヲ、オカシクロ、オカシクカ、オカシクニ、オカシク向、オカシクテ、オカシク正、オカシク挿、オカシクス、オカシク者、オカシクナ、オカシク一、オカシク看、オカシクシ、オカシク此、オカシク器械、
オカシクヲ、オカシク欠、オカシクキ、オカシクテ、オカシク左、オカシクカ、オカシクニ、オカシク用、オカシクス、オカシクハ、オカシク長、オカシクキ、オカシク湘、オカシク鉛、オカシク子、オカシクヲ、オカシク差、オカシクテ、オカシク鑄、オカシク製、オカシク球、オカシク頭、オカシクヲ、オカシク有、オカシクテ、
オカシク新、オカシク骨、オカシク條、オカシク偵、オカシク息、オカシク子、オカシクヲ、オカシク代、オカシク用、オカシクス、オカシクハ、オカシク即、オカシク内、オカシク息、オカシク子、オカシク球、オカシク頭、オカシクヲ、オカシク異、オカシク物、オカシク指、オカシク角、オカシク部、オカシクニ、オカシク送、オカシクリ、オカシク指、オカシクヲ、オカシク以、オカシクテ、オカシク會道、オカシク外、オカシク隆、オカシクヲ、オカシク按、オカシク觸、オカシクス、オカシクハ、オカシク切用、オカシクス、オカシクキ、オカシク部、オカシク分、オカシク標、オカシク的、



(甲) 會道異物指角 (乙) 一種性扶明 (丙) 一種性扶明
 會道切開術ニ於テ、オカシク致軟部ニ於テ切用ス、キ會道部ニ當リ標的ヲ在ル
 時、大ニ手所ヲ容易ニス、ノ便アリ、大ニ異物ニ於テ、其物自ラ標的、オカシク能
 此他、私ニ於テ、切用ニ先々會道内ニ挿送スル、器械ヲ用テ標的、オカシク

今所後有通割のヲ結合スノ通否ニ付スル一定ノ驗証ニ付テ之ヲ
合セテ欲セバ担テ精密ニ飲食物縫接同ニ審入ニ食道用田吉帝
飯ノ詳富等光ヲ起スラ防カレハカラス一若シ通道閉塞ニ由リテ
糧ヲ施スルハ確守ニ此危候ヲ免カレハシ又食道且外史ノ割口ヲ縫
合セシテ放置スルハ雖モ患者自ラ飲食物ヲ嚥下シ其管類ニ障
害セシテ嚥下ノ際食道ヲ閉塞スル管如ク管多ニ割口ヲ世排セ
シモノナリ此ノ管割口割次ニ肉芽ヲ生シ治癒ニ付テハ
食道ニ又ククシハビロトクハ始ラズニ就テ之ヲ行ヒモノニ割口ハ良
ノ理過ヲ取リ食道ノ兩端被覆ニ由リテ再ニ缝合シ嚥下枚能復致
スニ至リ此年所ヲ成績ヲ押シテクニ且ホ腫腫ニ侵サズ食道ニ
割口切除スルノ可ク高知團中ニアリクニ於テ此類ノ年所ニ後
来只一回クツニハ之ヲ施セリテ而シ其成績幸ニ良ナリト云フ

第二十七項 胃切開術トシテ胃瘻切除術

胃ノ腹内ノ系腸ニ屬スト至テ其切開術ハ食道ノ瘻瘻ニ密接スルハ故
為ニ之ヲ論セザレバ可ク而シテ此ノ通意ヲ故ニ前論ニ由リ瘻瘻
トシテ瘻瘻性瘻瘻ニ付リトス其他時トシテ精神病患者自後ノ目的ヲ以
テ肉又ガリ等ノ異物ヲ嚥下シ其大ニ此口ヲ通過シ難キ際胃切
開ヲ施スルアリ至レバ此異物ハ胃切開ヲ施カスルニ付テハ此口ニ即
初局ニ瘻瘻性瘻瘻ヲ生シテ次テ化膿シ腹膜ヲ汚染スルヲ得ハキ即
腹壁膿瘍ヲ生シ之ヲ切開スルハ異物即其内ニ付テは痛出スルヲ得ハキ即
之ナリ此瘻瘻ヲ取ルモノ胃切開術ヲ施セシ者ニ付テハ其瘻瘻後致ラ不良ナリ
トセス

又シ又ツバムルハノ統計ニ付テハ食道瘻瘻ノ為ニ用テ同ヲ施セシモノ三十三人ト
治癒セシモノ僅ニ五人ニ過キスト雖異物摘出ノ為ニ胃切開ヲ施セシ者ニ於

ラニナ人年十二ノ治程ヲ見カリ又為ヘルハ曾テ二年間胃中ニ積留
セシ由又ラ切開ニ托テ摘出セシツカ

トシラハ右胃切開後ノ新通脈ヲ左ノ肺ヲ切開セリ

ト腹腹ヲ培成シ胃腸腸ニ由リテ出口ノ積留スルモ

ト胃腸ニ因テ胃門積留ニ其積留而モ使腹腹ニ積ラテ陰陽得

ヘキモノ

カニ通脈

ト胃腸積留ノ出血ニ他ニ止血法キモノ、此積ニ托ラテ胃ノ筋

ヲ切開シ穿針法ヲ施シ或ハ積留部ヲ切開シ縫合ヲ施スニ由リテ

止血スルモノナリ

トニノ通脈積留ヲ未だ切開ノ切陰術ヲ行ハシ積留多クハ切開ノ全

部ニ旨有テ者トシテ切開ノ全數ニテ五人ニテ切開セシモノ二十一人ナリキ蓋シ術

未開切開ヲ施セシモノ全數ニテ五人ニテ切開セシモノ二十一人ナリキ蓋シ術

後數月間ハ似リニ血筋ノ經過ヲ取リテ雖モ多クハ淋巴腺及肝臓ニ積

留積スルカ見レズ也、而シテ積留ノ初期ニ於テ其初候轉易シテ之ヲ山

知シテ易ク難クニ積留既ニ多クシテ積留著キモノニ至レバ肝臓ニ積留

著ト積留著キモノナリ切陰ニテ切開シ積留ヲ取リ

而シテ通脈部ハ切開ノ積留ニキリテ積留ノ積留ニ至リテ積留著キモノ

為ニ切開ノ切陰ヲ施シ患者ハ積留ニ至リテ積留著キモノニ至リテ積留著キモノ

會通普通ニ積留ノ為ニ胃切開ヲ施シ積留ノ積留ニ至リテ積留著キモノ

腹腹ノ腹腹ノ積留ニ至リテ積留著キモノニ至リテ積留著キモノ

手術式古側腹切開、下部ニ指積留、此ニ於テ肋骨筋ニ保行シテ斜内上

部ヲ切下方ニ高ク皮膚ヲ切開シ其劍ノ一端大約劍狀突起、尖端ニ起リ

長ク大略十三仙送スルモノ、左直腹切開ニ至リテ積留ノ斜腹筋腹ノ皮膚

切開ニ至リテ之ヲ切離スル際、積留ノ積留ノ積留ノ積留ノ積留ノ積留ノ積留

